

# 菩薩の忍

## ——菩薩地『忍品』の研究——

矢板秀臣

### 序

本稿は、『瑜伽師地論』の中、『菩薩地(Bodhisattvabhūmi)』第11章「忍品」(Kṣāntipatāla. 略号 KṣP)の原典研究である。サンスクリット校訂本二本(W,Du)、サンスクリット写本三本(R,C,K)、チベット訳(Tib)、漢訳(Ch)、Sāgaramegha の注釈書(BbhV. チベット訳のみ現存)を参照し、同品のサンスクリットテキスト(KṣP pp. 1\*-14\*)と和訳とを提示し、菩薩の衆生救済論を探る一助にしたい。

『菩薩地』第9章「施品」から第14章「慧品」の六章において、六波羅蜜(布施、戒、忍辱、精進、靜慮、智慧)が説かれる。そのうちの第三の忍辱を論じるのが、本稿で扱う第11章「忍品」である。

「忍品」の構成は他の五章と同じように九節からなり、そして各節が同じように分類される<sup>1</sup>。即ち、(1)忍自性(kṣāntisvabhāva)、(2)一切忍(sarva-kṣānti)は二種あるいは三種とされ、(3)難行忍(dusvara-)は三種、(4)一切門忍(sarvatomukha-)は四種、(5)善士忍(satpuruṣa-)は五種、(6)一切行相忍(sarvakāra-)は六種と七種で合計十三種、(7)困窮し求める者に対する忍(vighātārthika-)は八種、(8)今世・他世を福樂とする忍(ihāmutrasukha-)は九種、(9)清浄なる忍(viśuddha-)は十種、にそれぞれ分類される。こうして忍辱(忍 kṣānti)が詳しく述べられている。

九節からなる忍品を要約すれば、以下のようである。

(1)忍自性(kṣāntisvabhāva)。菩薩の忍辱(忍 kṣānti)の本質は、他者が危害を加えてきた場合に、貪著の心を持つことなく、慈愛によって堪忍することである。<sup>2</sup>

<sup>1</sup> 布施品と静慮品については拙論(矢板2008、矢板2011)参照。

<sup>2</sup> 次節「一切忍」の中にではあるが、忍の本質を簡潔明瞭に説く文がある。即ち「(問)忍(kṣānti)とは何か。(答)【何事あっても】憤慨せず、怨まず、そして憎悪を引きずらない、これが忍と言われる」(KṣP p.5\*,13-14: kṣāntih̄ katamā... yan na kupati na pratyapakāram karoti nāpy anuśayaṇ vahati, iyam ucyate kṣāntih̄.) 本稿訳注8も参照。

(2)一切忍(sarvakṣānti)。本節は内容的に大変重要な位置を占めており、本節末尾に「このような【(2)一切忍】に依拠して、諸菩薩にとっての、【これ以降論じられていく】(3)難行忍(duṣkarakṣānti)等の中の細目がある」と説かれている。

菩薩には、在家者(gṛhin)か出家者(pravrajita)の違いによる二種の忍があるとされ、そして本節では主に、(a)他者による悪害を堪忍する忍、また、他者による悪害ではない場合の、(b)苦悩を耐え忍ぶ忍、そして(c)法を思惟し勝解する忍、の三種の忍が詳しく説かれる。

(2)(a)他者による悪害を堪忍する忍。他者による悪害の苦しみはすべて自分の前業に起因するのであり、菩薩はそれらをそのまま享受すべきである。従って、もし堪忍しないで反抗し、他者に害を与えれば、それは将来の自分の苦しみとなる。菩薩は以上のような道理(法 dharma)を受け入れて悪害を堪忍する、ということが、(2)(a)他者による悪害を堪忍する忍の主旨である。そして、そのように悪害を堪忍する際の心の持ち方、思惟法(想 samjhāna)を五種挙げている。第一(2)(a)(x1)は、悪害を加えている者が、前世において、例えば自分の父や母であったかもしれない、などと思惟して、怨憎を消し、親善なる気持ちで菩薩は堪忍する、ということである。さらには、悪害を加える者を菩薩は、(x2)一つの存在たるものにすぎないと思惟し、(x3)無常で不堅固なるものと思惟し、(x4)苦性のものであると思惟し、そして、(x5)利益し護持すべき眷属であると思惟して、堪忍し忍耐する。

(2)(b)苦悩を耐え忍ぶ忍。他者による悪害ではなくても、いかなる苦しみも自業自得の結果であると理解して、人として菩薩として、当然のことのように耐え忍ぶ。苦しみにはどのようなものがあるかと言えば、「一切あらゆる苦」を引き起こす縁により、八種が挙げられている。即ち、(y1)衣類や飲食物など四種の生活必需品(所依)の粗惡・僅少等による苦、(y2)無所得、誹謗、老病死など九種の世法(lokadharma)を基にして生じる苦、(y3)行住坐臥に関する苦、(y4)供養や修行における苦、(y5)乞食行を行う生活の中での、居住まいや離欲等による苦、(y6)善行を実践する中での心身疲労の苦、(y7)十一種の饒益有情戒<sup>3</sup>に基づく衆生饒益行(sattvārtha-kriyā)を実践する中での苦、(y8)出家の菩薩であれば衣鉢等に関する責務での苦、在家の菩薩であれば農工業等での果たすべき責務での苦、という、以上八種の苦(y1~y8)があり、これらを菩薩は、無上正等覚のために勤修しつつ、耐え忍ぶのである。

(2)(c)法を思惟し勝解する忍。解脱を得るための所依として真実義(tattvārtha)

---

<sup>3</sup> 饒益有情戒について矢板 2017 参照。

など八種あるが、それらについて菩薩は、正法の思択を通して十分に耐え忍んでは確實に了解する。その忍耐が一切忍の第三である。

(3)難行忍(*duṣkarakṣānti*)。非常に困難な忍耐として三種挙げられる。これは、自分より力の弱い者、あるいは王族等の支配下にある者に対し、慢心なく耐え忍ぶものである。阿含經にある所謂「最高の忍耐」を彷彿とさせる<sup>4</sup>。

(4)一切門忍(*sarvatomukhakṣānti*)。悪害をなすものを大きく四種に分類し、そういう者に対して忍耐すると説く。四種とは、友人、敵対者、中立者、そして第四に、自分より劣った、同等の、より優れたそれら三者である。

(5)善士忍(*satpuruṣakṣānti*)。優れた聖者が行う忍耐、つまり菩薩にとって理想とするべき忍耐、が五種挙げられる。第一には、忍耐することに成功、勝利、明るい未来を見出し、忍耐すれば将来において破滅無く、福樂あり、天界に生まれるものと觀て、耐え忍ぶ。さらなる四種は、自ずから忍を性とする、他者に忍耐するよう教導する、忍耐の素晴らしさを説く、そして忍耐する人を見れば喜び喝采を送る、というものである。

(6)一切行相忍(*sarvākārakṣānti*)。菩薩がさまざまな状況において忍耐を行う理由・原理を六種 (*i*～*vi*)、また菩薩が行う忍耐の種類・状況を七種 (*i'*～*vii'*)、挙げている。菩薩は、(i)忍耐しなければ良くない結果が生じるという恐怖から忍耐する。(ii)衆生に対する慈愛から忍耐する。(iii)菩提を得るために忍波羅蜜を円満せんと忍耐する。(iv)出家者は必ず忍を持つという世尊の教えの受理から忍耐する。(v)以前に忍の修練を経験している菩薩は本性から忍耐する。(vi)、無戯論(*nirabbhilāpya*)の諸法そのものを直視している[菩薩]は、諸法を如実に観察する観点から忍耐する。また菩薩は、(i')一切の悪害を、(ii')一切に対して、(iii')

<sup>4</sup> 例えば雑阿含經に次のようにある。赤沼 1937,p.388:「力ありて力なきものを忍ぶは、これ最勝の忍辱なりと云はる。力なき人は常に忍ぶ」(= SN I 478,8-11: yo have balavā santo dubbalassa titikkhati tam āhu paraman̄ khantiñ niccaṇ̄ khamati dubbalo.)

また内容的に、難行忍には奴僕行に通じるものがある。菩薩地撰事品には次のようにある:「また菩薩は、たとえ現に最勝第一の円満地位に在りながらも、奴僕(dāsa)のように、下僕(presya)のように、従者(vaśya)の子のように、旃荼羅(candāla)の童子のように、心低く、驕・慢・我執を破棄しては、諸衆生に益行を行なう」(矢板 2012 p.22。テキストは同 p.12\*, 9-11.)。これは四撰事のうちの利行(arthaçaryā)が説かれている中である。拙稿に指摘されているように(矢板 2012 序文参照)、菩薩地において四撰事は六波羅蜜と同列に扱われており、愛語と利行の解説は六波羅蜜と同じ九節から構成されている。上掲の文は、利行の中の第九節「清淨なる利行(viśudhārthaçaryā)」の第八に位置している。

一切の場所において、(iv')あらゆる時に忍耐し、(v')身体的にも、(vi')言葉でも、(vii')心でも、忍耐する。

(7) 困窮し求める者に対する忍(vighātārthikakṣanti)。まず、三種に分類される困難を抱えている衆生のために菩薩は忍耐する。即ち、(i)困って嘆願する者に対して、(ii)極悪非道の者、そして(iii)破戒の出家者に対して、菩薩は大悲心によって耐え忍ぶ。

さらには、求めるものが五種に分類され、菩薩は決意の忍従(vyavasāyasahisṇutā)なる忍耐によりそれを獲得する。菩薩が、(iv)苦惱する衆生に対してその苦惱を取り除いてやろうと精進努力している場合、(v)法を勤求している場合、(vi)法に随って法を行じようとしている場合、(vii)その法を他者に詳しく広説しようとしている場合、(viii)衆生のために適切に同伴援助しようとしている場合、それぞれにおいて菩薩は決意の忍従によって耐え忍ぶのである。

(8) 今世・他世を福樂とする忍(ihāmutrasukhakṣanti)。ここで挙げられる九種の忍耐により、菩薩自身と他者とが、現世における福樂ある善なる生活と、来世での安穏とを得られるという。即ち菩薩は、(i)不放逸なる生活の中にあって忍耐し、(ii)寒冷と高熱に対して、(iii)飢渴に対して、(iv)蚊虻などの虫類の悪害に対して、(v)風や日光に対して、(vi)蠍の悪害に対して、(vii)疲労から生じる身体的な困惑に対して、(viii)疲労から生じる肉体的な困惑に対して、(ix)衆生の生・老・病・死等に対して、という、以上のそれぞれに対して、慈愛によって、忍耐するのである。

(9) 清浄なる忍(viśuddhakṣanti)。受ける悪害に対する菩薩の秀でた忍耐、重要で大切な意味を持つ忍耐が、十種挙げられる。悪害を受けても菩薩は、(i)悪害で返報しない、(ii)怒りの心を起こさない、(iii)怨憎の心を起こさない、(iv)以前と変わりなく饒益の心でその者に相向かい、(v)万一、自分の行為をきっかけに悪害をなした者には陳謝し、また、(vi)他者たちからの陳謝は素直に受け取り、(vii)もし自分が不忍をなした場合には、自己への重々なる慚愧心を受持し、(viii)忍をなした場合には、仏・大師への益々の親愛と尊崇の念を受持し、(ix)害をなさずして益々の慈愛の念を諸衆生に対して持ち、(x)すべてにおいて不忍の法を捨て離欲者となる、という。

## 参考文献及び略号

### <一次文献>

- BBh Bodhisattvabhūmi.
- BBhV Bodhisattvabhūmivyākhyā (Sāgaramegha). sDe dge edition. D. No. 4047. (P No. 5548)
- C A Sanskrit manuscript of BBh. Bendall 1883, Add.1702.
- Ch Chinese translation of BBh. Taishō Shinshū Daizōkyō No. 1579 (『大正新脩大藏經』第三十卷) .
- D sDe dge edition of the Tibetan Tripitaka. 『デルゲ版チベット大藏經 東京大学文学部所蔵』.
- DāP Dānapaṭala, the 9th chapter of BBh. See 矢板 2008 (Text: pp.193-207 = pp.1\*-15\*).
- DhyP Dhyānapaṭala, the 13th chapter of BBh. See 矢板 2011 (Text: pp.99-105 = pp.1\*-7\*).
- Du N.Dutt (ed.), *Bodhisattvabhūmih*, (being the XVth Section of Asaṅgapāda's *Yogācārabhūmih*), Patna, 1978.
- K A Sanskrit manuscript of BBh. Goshima/Noguchi 1983, No.74.
- KṣP Kṣāntipaṭala, the 11th chapter of BBh. See the present paper (Text: pp. 1\*-14\*).
- MV Mahāvyutpatti. R.Sakaki (ed.), *Mahāvyutpatti*, Tokyo, 1981 (repr.). (榎亮三郎『翻訳名義大集』)
- P Peking edition of the Tibetan Tripitaka. 『影印北京版西藏大藏經』
- R A Sanskrit manuscript of BBh. Bandurski 1994, No.28, Xc 14/29.
- SN I Samyuttanikāya, vol.1. *The Samyuttanikāya of the Suttapitaka, Volume I, the Sagāthavagga*, (a critical apparatus by G.A.Somaratne, Ph.D.) published by Pali Text Society, Oxford, 1998.
- Tib Tibetan translation of BBh. D No. 4037, P No. 5538.
- W U. Wogihara (ed.), *Bodhisattvabhūmi, a Statement of whole Course of the Bodhisattva (being Fifteenth Section of Yogācārabhūmi)*, Tokyo, 1971 (repr.)

### <二次文献>

- Bandurski 1994 Frank Bandurski, “Übersicht über die Göttinger Sammlungen

- der von Rāhula Sāṅkṛtyāyana in Tibet aufgefundenen buddhistischen Sanskrit-Text”, In: *Untersuchungen zur buddhistischen Literatur, Sanskrit-Wörterbuch der buddhistischen Texte aus den Turfan-Funden*, Beiheft 5, Göttingen, pp. 9-126.
- Bendall 1883 C. Bendall, *Catalogue of the Buddhist Sanskrit Manuscripts in the University Library, Cambridge*, Cambridge.
- Goshima/Noguchi 1983 *A Succinct Catalogue of the Sanskrit Manuscripts in the Possession of the Faculty of Letters, Kyoto University*, compiled by Kiyotaka Goshima and Keiya Noguchi, Kyoto.
- Kragh 2013 Ulrich Timme Kragh, “*Yogācārabhūmi* and its Adaptation, Introductory Essay with a Summary of the Basic Section.” In: *The Foundation for Yoga Practitioners, The Buddhist Yogācārabhūmi Treatise and its Adaptation in India, East Asia, and Tibet*, Harvard Oriental Series, 75, pp. 22-286.
- 赤沼 1937 赤沼智善譯『相應部經典一』(南傳大藏經 第十二卷), 東京, 1993(repr.).
- 加藤 1932 加藤精神譯『瑜伽師地論』(國訳一切經、瑜伽部 三), 東京, 1982(repr.).
- 矢板 2008 矢板秀臣「菩薩の布施—『菩薩地』布施品の研究—」(成田山仏教研究所紀要 第 31 号, pp. 157-207)。
- 矢板 2010 同「菩薩の偉力—『菩薩地』威力品の研究—」(成田山仏教研究所紀要 第 33 号, pp. 77-123)。
- 矢板 2011 同「菩薩の瞑想—『菩薩地』靜慮品の研究—」(成田山仏教研究所紀要 第 34 号, pp. 79-105)。
- 矢板 2012 同「菩薩の寛容—『菩薩地』攝事品の研究—」(成田山仏教研究所紀要 第 35 号, pp. 1-46)。
- 矢板 2017 同「饒益有情戒について」(成田山仏教研究所紀要 第 40 号, pp. 27-55)。

## 『菩薩地』「忍品」和訳

総頌(uddāna)は、前と同様に、即ち『戒品(sīlapāṭala)』と同様に理解すべきである<sup>1</sup>。

### (1) <忍自性(kṣāntisvabhāva)>

(問) これらのうち、菩薩の忍(kṣānti)の自性<sup>2</sup>とは何か。(答) 思考力に依拠して、あるいは本性によって、他者による悪害(apakāra)を堪忍する(marṣanā)<sup>3</sup>、即ち、一切[衆生]のために堪忍し、一切を堪忍し、そして只々慈愛(karuṇā)によって貪愛なき心で堪忍する、これが、畢竟、菩薩の忍の自性である、と理解すべきである。

### (2) <一切忍(sarvakṣānti)>

(問) また、菩薩の一切忍(sarvakṣānti)とは何か。(答) それは、一方では在家者(grhin)として関係する【忍】と、他方では出家者(pravrajita)として関係する【忍】の二種であると知るべきである。そして、その【在家者と出家者の】それぞれとして関係する【二種の忍】おののおのが、【次のように】三種であると理解すべきである。即ち、(a)他者による悪害を堪忍する忍、(b)苦悩を耐え忍ぶ忍、そして(c)法を思惟し勝解する忍である。

### (2) (a) <他者による悪害を堪忍する忍(parāpakāramarṣanākṣānti)>

そのうち、菩薩は他者による悪害をどのようにして堪忍して忍耐するのか。(答) 激しい【苦しみ】、連続して起こる【苦しみ】、さまざま【苦しみ】、そして長時間続く苦しみが、他者による悪害を元に生じ、【菩薩自身に】現前した場合、菩薩は次のように思考するのである：

「これは私自身の【過去の】行い（業）によって【生じた】過失である。だから私は、

<sup>1</sup> 本稿後出のテキスト(p.1<sup>st</sup>)注2参照。総頌(uddāna)は、六波羅蜜を扱う六章に共通する九節の名称を挙げるものの、布施品と戒品の冒頭には省略されずに同文にて明示されている。しかもその両品では直後に、それぞれ「戒」と「布施」の語が付された九節が示されている。忍品では、「戒品と同様に理解するべきである」として、両方とも省略されている。忍品の漢訳(Ch)には両方あるが、チベット訳(Tib)はない。

<sup>2</sup> 原文は svabhāvakṣāntiḥ であるが、この項目（忍自性）の最後には kṣāntisvabhāvah とある。チベット訳はどちらも bzod pa'i ḥo bo ūid である。漢訳(Ch)は順に「自性忍」「忍之自性」であり、梵語原文に一致する。

<sup>3</sup> 原語 marṣanā のチベット訳は ji mi sñam pa (BBhV も)。何も思わない、何も感じない、動じない、というニュアンスであろうか。

自分自身がかつてなした不淨なる行いから【生じた】この苦果を享受するものである。私は【この】苦しみを望まないが<sup>4</sup>、そのように堪忍しなければ、それが将来さらにまた【私の】苦しみの原因となり【私の苦しみを生じさせる】。私は、【不堪忍は】苦悩の因になるというこの【苦の】法(dharma)を受け入れて行くべきである。即ち、この好ましからざる【苦法】は【他の誰のものでもなく】私自身のものであり、私が自分自身で、その【苦法】を私自身に結びつけておくべきである。そうすれば、私によって私だけに悪害が生じ、他の誰においてもそうはならない。【そもそも】自他身に関わるこれら一切諸行は(sarvасаmskārāḥ)実に、【個々】自性から、苦悩を本性としている(duḥkhaprakṛtika)。まず他者たちの中には無知な者(ajñā)があって、本性から苦しんでいる我々に彼らが更なる苦悩を加えることはある。しかし、本性から苦しんでいる他者たちに我々が更なる苦悩を加えるというのは、智慧者であり善者たる我々に相応しいことではない。自利行を実践している声聞たち(srāvaka)でさえ、その不堪忍は自他の苦悩を生じさせるものであって、適切ではない。ましてや、利他行を実践している(parārthaprayukta)我々については、言うまでもない」と。

このように考察して、かの菩薩は五種の想(samjñā)を勤修しては、友・敵・中庸の諸衆生、劣等・中等・殊勝の【諸衆生】、有樂・有苦の【諸衆生】、有徳・有罪の【諸衆生】による一切の悪害(apakāra)に耐えるのである。

#### (2)(a)(x) <五種の想(pañca samjñāḥ)>

五【種の】想とは何か。(1)前世を【鑑みての】親善(suhṛd)なる想、(2)只々法に隨順する(dharmamātrānusārin)想、(3)無常の想(anityasamjñā)、(4)苦の想(duḥkhasamjñā)、(5)護持の想(parigrahasamjñā)である。

#### (2)(a)(x1) <前世を【鑑みての】親善(suhṛd)なる想(pūrvajanmasuhṛtsamjñāḥ)>

(問) 菩薩はいかにして、悪害をなす諸衆生に対して【前世を鑑みての】親善なる想を勤修するのか?。(答) 菩薩は次のように思惟する。即ち、「長時の隔たりがあるが、前世の他生において、【悪害をなす】この衆生が、私の母、あるいは父、あるいは兄弟、あるいは姉妹、あるいは阿闍梨、あるいは師匠、あるいは尊師、あ

<sup>4</sup> チベット訳(D,P)は、anarthī を mi bzod de (「忍ばない」意) としている。しかし注釈BBhVは正しく mi 'dod de (anarthī)としている。Cf. BBhV 180a5-6: mi bzod pa ni phyi ma la rañ gi rgvud kyi sdug bsñal gyi rgv yin pa ñid du so sor brtags nas sdug bsñal ni mi 'dod la bde ba ni 'dod pa ñid yin pas bzod par byed de. gañ gi phyr smras pa “**bdag ni sdug bsñal mi 'dod de** (= duḥkhenā cāham anarthī)” žes bya ba la sogz pa'o. 「堪忍しないと[それは]将来、自分自身の苦しみの原因となる」と考察して、苦しみを望まず樂を望むのであるなら、堪忍すべきである。だから『私は苦しみを望まないが』云々と言う。

るいは副尊師、ではなかったと、容易に[決定]できることではない。このように如理作意する【菩薩】において、悪害をなす諸衆生に対する怨憎の想は消滅し、そして親善なる想が生じる。彼は、このような【前世を鑑みての】親善なる想に基づいて、悪害を堪忍し忍耐するのである。

(2)(a)(x2) <只々法に隨順する想(*dharmaṁatrānusāriṇī samjñā*)>

(問) 菩薩はいかにして、悪害をなす諸衆生に対して、只々法に隨順する想を勤修するのか?。(答) 菩薩は次のように思惟する。即ち、「これ[一切のもの]は、諸縁に依拠して生じたもので<sup>5</sup>、単なる存在(saṁskāra)、単なる法(dharma)に過ぎない。この世には、[人を]罵倒すべき<sup>6</sup>、激怒すべき、殴打すべき、嘲弄すべき、誹謗すべき、あるいは逆に、罵倒されるべき、激怒されるべき、殴打されるべき、嘲弄されるべき、誹謗されるべき、私なるものは、決して存在しないし、そのような衆生、生命、生類も決して存在しない」。このように如理作意する【菩薩】において、衆生の想(sattvasamjñā)は消滅し、そして只々法なる想(*dharmaṁtrasamjñā*)が生じる。彼は、このような只々法なる想に基づき依拠して、他者からの一切の悪害を堪忍し忍耐するのである。

(2)(a)(x3) <無常の想(anityasamjñā)>

(問) 菩薩はいかにして、悪害をなす諸衆生に対して無常の想を勤修するのか?。(答) 菩薩は次のように思惟する。即ち、「生まれそして存在する如何なる衆生も、すべて無常にして、死滅を性としている。だから、その命を奪うとは、これ最大の危害である。このように、本性から死滅を性とする無常なる諸衆生に対して不淨なる心を起こすなど、有智者には凡そふさわしくないことであり、況や、手で、石で、棒で乱暴するなどあってはならない。また如何なる形にせよ、命を奪うことはあってはならない」。このように如理作意する【菩薩】において、【衆生について】常住堅固の想(nityasārasamjñā)は消滅し、無常不堅固の想(anityasārasamjñā)が生じる。彼はその無常不堅固の想に基づいて、一切の悪害を堪忍し忍耐するのである。

(2)(a)(x4) <苦の想(duḥkhasamjñā)>

(問) 菩薩はいかにして、悪害をなす諸衆生に対して苦の想(duḥkhasamjñā)を勤修するのか?。(答) 菩薩はまず、諸衆生は、たとえ大きな福楽にあっても、[彼らが]

<sup>5</sup> Cf. BBhV 181a4-5: “rkyen la rag las pa daṇ (= *pratyayādhinam*)” žes bya ba ni srid pa brag ca lta bur yid la byed pa daṇ gzugs brfian lta bur yid la byed pa’o. 「『諸縁に依拠して生じたもの』とは、音響のごときものと想われる、影のごときものと想われる」。

<sup>6</sup> テキスト注40に示されている MV 8708-8712 参照。

かの三苦、即ち、行苦(samskāraduhkhatā)、壞苦(vipariṇāmaduhkhatā)、苦苦(duhkhaduhkhatā)、に捕われているのを知見しており、ましてや、苦渋に陥っている【諸衆生】を【多く知見している】。彼は【諸衆生を】そのように知見しては次のように思惟している。即ち、「我々は、常に苦に瀕している諸衆生の苦を取り去るために、そして【それ以上】苦を受けさせないように、勤め励むべし」。このように如理作意する【菩薩】において、樂の想(sukhasamjñā)は消滅し、苦の想が生じる。彼はその苦の想に基づいて、他者たちの一切の惡害を堪忍し忍耐するのである。

(2)(a) (x5) <護持の想(parigrahasamjñā)>

(問) 菩薩はいかにして、惡害をなす諸衆生に対して護持(parigraha)の想を勤修するのか?。(答) 菩薩は次のように思惟する。即ち、「悟りを得るべく發心した私は『一切衆生のために私は利益をなすべし』と【一切衆生を私の】眷属(kadatra)として護持しているのであるから、『彼らのために私は利益をなそう』と一切衆生のためを思いながら、惡害を堪忍せずに私は【衆生に対して】只々不利益をなすべきである、というの私にとって相応しくない」と。このように如理作意する【菩薩】においては、惡害をなす諸衆生に対して「他者」との想<sup>7</sup>は消滅し、【眷属として捉える】掌握の想が生じる。彼はその掌握の想に基づいて、他者たちの一切の惡害を堪忍し忍耐するのである。

(問) 忍(ksānti)とは何か。(答) 【何事あっても】憤慨せず、怨まず、そして憎悪を引きずらない、これが忍と言われる。<sup>8</sup>

(2)(b) <苦惱を耐え忍ぶ忍(duhkhādhivāsanāksānti)>

(問) 苦惱を耐え忍ぶ忍とは何か。(答) 菩薩は次のように思惟する。即ち、「私は以前には、欲心的行動を行い、諸欲を追い求め、【後々の】苦の因であると了解しつつ、苦を本性とする諸欲のために【行動し】、農業、商業、王家用人の業に従事しては、多くの辛辣なる苦を受け、耐え忍び、享受した。このように私は、無意味に、ただ苦を【受ける】ためだけに【行動し】、無知という過誤に基づいて思考しつつ、大なる苦を受容した。しかし今や福樂をもたらす善に従事する私ではあるが、思うに、百千億倍の苦を耐え忍ぶことを受容するのが【私には】相応しい。それより少

<sup>7</sup> Tib: gžan yin no sñām pa'i 'du śes.

<sup>8</sup> BBhV によれば、この文は(2)(a) <parāpakāramarşaṇāksānti> を総括する文であり、また「憤慨せず」は心情のこと、「怨まず」は身体と言葉のことという。BBhV 181b3-4: bzod pa dañ po'i dbañ du byas nas smras pa "mi 'khrugs pa dañ (= na kupyati)" žes bya ba ni sems so, "phyir gnod pa mi byed pa dañ" (= na pratyapakāram karoti) žes bya ba ni lus dañ nág gis so. 本稿序文注2も参照。

ない[苦の受容]は言うまでもない。菩提(bodha)のために行じる菩薩はこのように如理作意しつつ、一切あらゆる苦(sarvavastukam duhkham)をも耐え忍ぶ。

(2)(b)(y)

(問) 一切あらゆる苦(sarvavastukam duhkham)とは何か<sup>9</sup>。(答) それは、まとめると八種であると知るべきである。即ち、(1)所依(samñisraya)を縁とする[苦]、(2)世法(lokadharma)を縁とする[苦]、(3)威儀(iṛyāpatha)を縁とする[苦]、(4)法の護持(dharmaparigraha)を縁とする[苦]、(5)乞食行(bhikṣakavṛtta)を縁とする[苦]、(6)勤修疲労(abhiyogaklama)を縁とする[苦]、(7)衆生の饒益(sattvārthakriyā)を縁とする[苦]、(8)責務(itikaraṇīya)を縁とする[苦]、の八種]、である。

(2)(b)(y1) <所依を縁とする苦(samñisrayādhiṣṭhānam duhkham)>

所依(samñisraya)は四[種]である。[仏道に入る者は]それら[四種の所依]に依拠することにより、正しく説かれた法教(dharmavinaya)に基づいて出家者(pravrajyā)・受戒者(upasampad)・比丘(bhikṣu)となるのである。[四種の所依とは]即ち、衣類、飲食物、座臥具、病気に対する医薬資具である。菩薩は、それら[所依]が粗悪であっても僅少であっても、不敬を以て[得られても]そして嫌悪を以て得られても、悲しむことなく、嫌うことなく、また、その為の努力を惜しむことはない。こうして[菩薩は]、所依を縁とする苦を耐え忍ぶ。

(2)(b)(y2) <世法を縁とする苦(lokadharmādhiṣṭhānam duhkham)>

世法(lokadharma)は九[種]である。即ち、(i)無所得、(ii)不名誉、(iii)誹謗、(iv)苦、(v)消滅を性として持つものにとっての消滅、(vi)喪失を性として持つものにとっての喪失、(vii)老いを性として持つものにとっての老い、(viii)病いを性として持つものにとっての病い、(ix)死を性として持つものにとっての死[という九]である。

これら[九種の]世法の全て、あるいは一つ一つが[衆生に]出現・生起することにより苦が生じる。これが「世法を縁とする(lokadharmādhiṣṭhānam)[苦]」と言われる。菩薩はこれに遭遇しても、その[忍の]為の努力を惜しむことなく<sup>10</sup>、【よく】思擇しては忍受し、耐え忍ぶ。

<sup>9</sup> 前項(2)(b)の末尾に「一切あらゆる苦をも耐え忍ぶ(sarvavastukam duhkham adhivāsayati)」とあった。BBhVによれば、「一切あらゆる」とは、あらゆるものから生じる意、とのことである。 Cf. BBhV 182a3: “gži thams cad las byuñ ba (= sarvavastukam)” žes bya ba ni thams cad las byuñ ba’o.

<sup>10</sup> 「その為の努力を惜しまない(tannidānam vīryam srāpasyati)」という言葉は、この後に頻出するが、それにおいては、耐え忍ぶ努力を惜しまない、の意で使われているので、ここでもそのようく解する。

(2)(b)(y3) <威儀を縁とする苦(īryāpathādhīṣṭhānam duḥkham)>

威儀(īryāpatha)は四[種]、即ち、行・住・坐・臥である。このうち、行と坐によつて、日中あるいは夜間、覆われるべき[障りある]諸法から心を清めつつ、それにより疲労から生じる苦を耐え忍ぶ。そして、適切でない時に、床座、座具、草座、葉座において、[耐え忍んでは]脇をつけたりしない。

(2)(b)(y4) <法の護持を縁とする苦(dharma-parigraha-dhīṣṭhānam duḥkham)>

法の護持は七[種]である。即ち、(i)三宝の恭敬供養(pūjopasthāna)、(ii)尊師の恭敬供養、(iii)諸法の摂受、(iv)摂受した[諸法]を他者たちに広く宣説すること、(v)[諸法を]広く声高に誦誦すること、(vi)一人空閑處にあって正しく思惟・思慮・観察すること、(vii)瑜伽作意(yogamanasikāra)により維持される止觀修習、[以上の七種]である。

この七種の法の護持を勤修する菩薩に苦が生じるが、それをも彼は耐え忍び、そしてその為の努力を惜しまない。

(2)(b)(y5) <乞食行を縁とする苦(bhikṣākavrītādhīṣṭhānam duḥkham)>

乞食行(bhikṣākavrīta)も七種であると理解すべきである。(i)頭髪や髭を剃るなどして、在家者の様相を棄捨することによる[自分の姿の]異形を容認すること。(ii)変貌し色褪せた衣を身につけることによって、[自分の衣服の]色調の変化を容認すること。(iii)あらゆる世間的状況の中にあっての制限された居住まいによって、[普通とは]異なる生活行動をなすこと。(iv)農業等の世間的事業から離断して、他者から得られる[食料等]で生計を立てることにより他者依存の生活をすること。(v)[自分で]得たものを貯蓄として受容することなきが故に、生涯、他者から[自己の]衣服等を求める。 (vi)非梵行(abrahmacarya)なる淫慾の法を離脱することにより、生涯、人間としての諸欲を捨てて行動すること。(vii)技芸・舞踊・歌舞・笑劇などの鑑賞を断つことにより、そして、友人・親友・同期者たちと共に笑い遊び喜び戯れることを断つことにより、生涯、人間的な遊楽を捨てて行動すること。

以上、このような艱難辛苦の乞食行によって生じる苦を菩薩は耐え忍び、そしてその為の努力を惜しまない。

(2)(b)(y6) <勤修疲労を縁とする苦(abhiyoga-klamādhīṣṭhānam duḥkham)>

善なる事柄を勤修した菩薩にも肉体的疲労そして精神的苦痛が生じるが、[菩薩は]それらを耐え忍び、そしてその為の努力を惜しまない。

(2)(b)(y7) <衆生の饒益を縁とする苦(sattvārthakriyādhīṣṭhānaṇ duhkham)>

衆生饒益の行いは、以前と同様に<sup>11</sup>、十一種であると知るべきである。菩薩はそれら[十一種の衆生饒益]に関わって生じる苦を耐え忍び、そしてその為の努力を惜しまない。

(2)(b)(y8) <責務を縁とする苦(itikaranīyādhīṣṭhānaṇ duhkham)>

[菩薩の中でも]出家者であれば、その責務に衣や鉢に関する仕事等があり、また在家者であれば、その[責務]に正規の農業、商業、王家用人等がある。菩薩はそれらに関わる苦を耐え忍び、そしてその為の努力を惜しまない。

菩薩は、何らかの苦に瀕していても、必ずや無上正等覚のために勤修し、[無上正等覚のために]勤修しないということはない。また、既に勤修したならば[そこから]退転することなく、そして、当惑せずに、心の雜染なく、勤修する。

以上が、(2)(b)苦惱を耐え忍ぶ忍(duḥkhādhivāsanākṣānti)と言われるものである。

(2)(c) <法を思惟し勝解する忍 (dharmanidhyānādhimokṣakṣānti)>

次に、菩薩の、法を思惟し勝解する忍(dharmanidhyānādhimokṣakṣānti)とは何か。菩薩においては、正法の思詫によってよく確立されている[正しい]覚知(buddhi)により<sup>12</sup>、八種の解脱の所依(vimuktyadhiṣṭhāna)に対しての勝解(adhimukti)が十分安立している。[八種の解脱の所依とは]即ち、[仏法僧の三]<sup>(1)</sup>宝の功德(ratnaguṇa)<sup>13</sup>、<sup>(2)</sup>真実の意義、<sup>(3)</sup>諸仏諸菩薩の偉大なる威力(prabhāva)<sup>14</sup>、<sup>(4)</sup>原因、<sup>(5)</sup>結果、<sup>(6)</sup>自己の到達すべき対象、<sup>(7)</sup>その到達のための方法、<sup>(8)</sup>認識されるべき対境である。そしてこの[八種の解脱の所依に対する]勝解は、また、[次の]二つの理由から、十分安立している。即ち、長時間の薰習(abhyāsa)と、非常に清浄なる認識の成就とによってである。

以上これが、諸菩薩の(2)一切忍(sarvakṣānti)であり、[諸菩薩の在家者・出家者と

<sup>11</sup> 饒益有情戒(sattvārthakriyāśila, sattvānugrāhakamī śīlam)のことである。これについては矢板 2017 に詳しい。

<sup>12</sup> Cf. BBhV 184a1: de la rigs pa rnam pa bZi la brten nas rnam par 'byed pa ni ſin tu brtags pa'o (= *suvicārīta*)。「このうち、四種道理（観待、作用、証成、法爾）に基づいて思索すると[覚知が]よく確立される」。

<sup>13</sup> Cf. Ch: 三寶功德處。

<sup>14</sup> Cf. BBhV 184a2: mthu chen po (= *mahāprabhāva*) ni sñār bstan pa'i rnam pa gsum mo。「偉大なる威力とは、既述の三種[の威力]（神通威力、生得威力、法威力）である」。これについては矢板 2010（序文など）参照。

いう】二つの側面に依拠している<sup>15</sup>。このような【(2)一切忍】に依拠して、諸菩薩にとっての、[これ以降論じられていく】(3)難行忍(*duṣkarakṣānti*)等の中の細目があると、理解すべきである<sup>16</sup>。

(3) <難行忍(*duṣkarakṣānti*)>

(問) 次に、菩薩の難行忍(*duṣkarakṣānti*)とは何か。(答) これは三種であると知るべきである<sup>17</sup>。(i)このうち、菩薩は力弱い諸衆生によって[引き起こされる]悪害を耐え忍ぶ。これが第一の難行忍である。(ii)支配者(prabhu)であり[すべてを自分の思うがままにできる立場である場合に、自分から臣下等に対して悪害をなさないように]、自身で耐え忍ぶ。これが第二の難行忍である。(iii)より低い種姓境界の諸衆生によって[引き起こされる]最大最高の悪害を耐え忍ぶ。これが第三の難行忍である。

(4) <一切門忍(*sarvatomukhī ksāntih*)>

(問) 次に、菩薩の一切門忍(*sarvatomukhī ksāntih*)とは何か。(答) これは四種であると知るべきである。このうち、(i)菩薩は友人によって[引き起こされる]悪害を忍耐し、(ii)敵対者によって[引き起こされる悪害を]も、(iii)中立者によって[引き起こされる悪害を]も、そして、(iv)[自分より]劣った、同等の、より勝れたそれら[友人等]三者によって[引き起こされる悪害を]も忍耐する。

(5) <善士忍(*satpuruṣakṣānti*)>

(問) 次に、菩薩の善士忍(*satpuruṣakṣānti*)とは何か。(答) これは五種であると知るべきである。(i)菩薩たるものは、ものの初めから、忍に成功(*anuśamṣā*)を見出している。即ち、「忍耐ある人は、未来において、怨害無きこと多く、破滅無き

<sup>15</sup> 本項(2)一切忍(*sarvakṣānti*)の冒頭部を参照：tatra katamā bodhisattvasya sarvakṣāntih. sā dvividhā draṣṭavyā gr̥hipakṣāśritā pravrajitapakṣāśritā ca, sā punar ubhayapakṣāśritā<sup>1</sup> api trividhā veditavyā. (KṣP 1<sup>1</sup>,16-17)

<sup>16</sup> Cf. DāP 12<sup>2</sup>,6-8: evaŋ hi bodhisattvayādhyātmikabāhyasarovavastudānaprabhedo vistarena veditavyaḥ. ata ūrdhvam asmād eva sarvadānaprabhedāt tadanayaḥ sarvo duskarādānaprabhedo veditavyaḥ. 「以上によって、菩薩の内的外的一切のものの布施の分析が、詳細に[説かれた]と理解すべきである。これより以降は、その一切布施の分析に基づき、それ以外のすべての[布施、すなわち]難行等の布施の分析が[説かれると]と理解すべきである」(矢板 2008 p.186)。

Cf. BBhV 184a6: bzod pa thams cad du dka' ba'i bzod pa la sogs pa rnam par gžag pa bstan pa'i phyir smras pa "de la brten nas (= tām āśritya)" zes bya ba la sogs pa la.

<sup>17</sup> Cf. BBhV 184a6-7: dka' ba'i bzod pa yañ rnam pa gsum du rnam par gžag par bya ste, bzod par bya ba'i khyad par dañ bzod par byed pa'i khyad par dañ gnod pa'i dños po'i khyad par ro. 「難行忍はまた三種であると確定される。即ち、[悪害を受け]忍耐させられる者の特殊な場合、忍耐する者の特殊な場合、悪害そのものの特殊な場合である」。

こと多く、福楽と喜悦を多く持ち、臨終を迎える際に恨み辛みを持っていることなく、身命終止後には善趣、天界、諸天の中に生まれる」と[思考している]。彼はこのように[忍に]成功を見出している。(ii)そして[菩薩は]自ずから忍[を性]とし、(iii)他者には忍を[行するよう]教導し、(iv)忍の素晴らしさを説き、(v)そして忍ある人に会えば、喜悦して喝采する。

#### (6) <一切行相忍(sarvākārakṣānti)>

(問) 次に、菩薩の一切行相忍(sarvākārakṣānti)とは何か。(答) これには六種と七種とがあり、一つに合わせれば十三種であると理解するべきである。

(i)まず菩薩は、忍無きは好ましからざる結果をもたらすと知っているので、[その]恐怖からも忍耐する。(ii)[菩薩は]諸衆生に対して同情(dayā)の心を持ち、悲愍(kārunya)の心を持ち、親愛(snigdha)の心を持つので、[この]慈愛(sneha)[の心]からも忍耐する。(iii)[菩薩は]無上正等覚(samyaksambodhi)に対して篤き願望を持ち、そして忍の完成(忍波羅蜜, kṣāntipāramitā)を円満せんと欲しており、この理由からも忍耐する。(iv)世尊(bhagavat)は、出家者(pravrajita)は忍をその力として持っていると説かれた。従ってこの故に、受戒した出家者にとって、忍を[その性として]保持しないことは相応しいことではない、と[菩薩は思慮]し、[このように]法(dharma)の受理ということからも忍耐する。(v)卓越した種姓にあり、以前に<sup>18</sup>忍の修練を経験して現在が在る[菩薩]は、自然本性からも忍耐する。(vi)一切の諸法を、衆生から離れて[客観的に]理解して、無戯論(nirabhilāpya)の諸法そのものを直視している[菩薩]は、諸法の真の観察(nidhyāna)からも忍耐する。

(i')[菩薩は他者による]一切の悪害を忍耐する。(ii')一切のものに対して忍耐する。(iii')一切の場所において忍耐する、即ち、あるいは空閑處において、あるいは大衆の面前で、[忍耐する]。(iv')一切の時において忍耐する、即ち、朝も、日中時にも、日暮れ時にも、また、夜も、あるいは昼間も、過去においても、未来においても、現在時においても、また病であっても、健康であっても、困窮していても<sup>19</sup>、好調時であっても、[忍耐する]。(v')暴力をふるわないから、身体的にも忍耐する。(vi')心無い言葉を発しないから、言葉的にも忍耐する。(vii')瞋恚[の心]を起こさず、不淨なる心を持たないから、心情的にも忍耐する。

#### (7) <困窮し求める者に対する忍(vighātārthikakṣānti)>

<sup>18</sup> Cf. BBhV 185a3: “śnon (= pūrvake)” žes bya ba ni mos pas spyod pa'i gnas skabs so. 「『以前に』とは勝解行[地]のことである」。

<sup>19</sup> Tib: rgud pa for patita, and dar ba for utthita. Ch: 若臥若起。

(問) 次に菩薩の、困窮し求める者に対する忍(vighātarthikakṣānti)とは何か。(答) これは八種であると理解すべきである。

(i) 苦惱しつつ嘆願する者による懇願(yācñā)の闘争を忍耐する。 (ii) 極悪非道をなす罪惡なる衆生に対して、法の大悲[心](dharma-mahākaruṇā)に依拠して、加害[の心](āghāta)<sup>20</sup>を起こさないよう忍耐する。 (iii) 破戒の出家者に対して、法の大悲[心]に依拠して、加害[の心]を起こさないよう忍耐する。

そして、決意をもっての忍従(vyavasāyasahis̄ṇutā)なる忍耐に[次の]五種がある。 (iv) 苦惱する衆生に対して、その苦惱を取り除いてやろうと精進努力している[菩薩]の[決意の忍従]、(v) 法を勧求する[菩薩]の[決意の忍従]、(vi) 法に随って法を行じている[菩薩]の[決意の忍従]、(vii) まさにその法を他者に詳しく広説している[菩薩]の[決意の忍従]、(viii) 衆生のためになされねばならないことと、衆生によってなされねばならないことに対して、適切に同伴援助している[菩薩]の、決意の忍従である。

以上の八種が「困窮し求める者に対する忍」と言われるものである。 [身近にある] 物事によって困窮している(vighātin)衆生に対しては<sup>21</sup>、忍(kṣānti)によってその物から離反せざる所以あり、また、或る物事を求める(arthin)[菩薩]は、[決意の忍従なる忍によって]それを獲得するのである。

#### (8) <今世・他世を福樂とする忍(ihāmutrasukhā kṣāntih)>

(問) 次に菩薩の、今世・他世を福樂とする忍(ihāmutrasukhā kṣāntih)とは何か。(答) これは九種であると理解すべきである。 (i) 菩薩は、不放逸[なる生活]に住しつつ、善なる諸法の中において忍耐あり、(ii) 寒冷と高熱に対して[忍耐あり]、(iii) 飢渴に対して[忍耐あり]、(iv) 蚊虻[なる虫類]の接触[の害]に対して[忍耐あり]、(v) 風や日光に対して[忍耐あり]、(vi) 蠍の接触[の害]に対して忍耐あり、(vii) 疲労から生じる身体的な倦怠と困憊に対して忍耐あり、(viii) [疲労から生じる]肉体的な倦怠と困憊に対して忍耐あり]、(ix) 輪廻の中にある人たちの生・老・病・死等の苦惱に対して、諸衆生への慈愛をこそ最優先にして<sup>22</sup>、[忍耐する]。

以上このように菩薩は忍耐しつつ、自分自身は、現世においては悪不善の法に交わらず安穏なる生活の中に住し、また、来世の安穏のための因を受持しつつ生きており、そして他者たちに対しても、[彼らの]現世と来世の安穏のために努力

<sup>20</sup> *Tib (for āghāta): kun nas mnar sems.* Cf. MV 2104(常起害心, 普害心).

<sup>21</sup> Cf. BBhV 185b4: “gaṇ gis phoṇs par 'gyur ba de ni (= yena ca ... vighātinah ... tasya)” žes bya ba la, mi 'dod pa daṇ mi 'phrod pa ni phoṇs par gyur pa'o. 「『物事によって困窮している』とあるが、望まないものや不快なものが困窮しているものである」。

<sup>22</sup> チベット訳では、「諸衆生への慈愛をこそ最優先にして」なる言葉は、最初の「(i)菩薩は、不放逸[なる生活]に住しつつ、善なる諸法の中において忍耐あり」の前にあるから、本項目の全九種に向けられている、と解釈されよう。本稿テキスト注参照。

している。従ってこれが「今世・他世を福樂とする忍」と言われる。

(9) <清淨なる忍(*viśuddhā kṣāntih*)>

(問) 次に菩薩の、清淨なる忍(*viśuddhā kṣāntih*)とは何か。(答) これは十種であると理解すべきである。菩薩は他者たちから悪害、妨害、犯行を受けても、(i)悪害を返報せず、(ii)心に怒りを起こさず、(iii)怨憎の気持ちを起こさず、(iv)以前と同様にその後も饒益の気持ちをもって[その者に]相向かい、(v)[自分の]饒益行為をきっかけに悪害をなした者を見捨てることなく、実に自分自身から悪害者に対して陳謝を申し出、(vi)[確かに自分を]悩ましたからといって、他者たちからの陳謝を「[私と同じように彼らも]苦しまされるべし」と言って受け取るようなことはせず、(vii)まさにこのような思考に基づき、[もし]不忍[をなした場合]については[自己への]重々なる慚愧と羞恥心を受持し、(viii)忍[をなした場合]には、[仏]大師への益々の親愛と尊崇[の念](*premagaurava*)を受持し、(ix)衆生への無害をなしては、諸衆生に対する益々の慈愛(*karuṇā*)の念を受持し、(x)ことごとく不忍の法の助伴<sup>23</sup>を捨て、欲界の中の離欲者となる。

以上これら十種[の忍]により、菩薩の忍は清淨(*viśudha*)で無垢(*nirmala*)であると知るべきである。

以上、(1)自性忍を初めとし、(9)清淨忍を最後とする忍、広大無量の大菩提なる結果を生ずる[忍]に基づいて、菩薩は無上正等菩提を覺證する。

以上で、『菩薩地』という基盤たる瑜伽處の中、第十一「忍品」は終わる。

---

<sup>23</sup> Cf. BBhV186a6-7: **mi bzod pa'i chos kyi grogs** (= *aksāntidharmasahāya*) ni khoṇ khro la sog pa'i ūñon moñis pa rnams so. 「不忍の法の助伴とは、瞋恚等の煩惱のことである」。

**Text of the *Kṣānti* Section,  
the 11th Chapter of the Bodhisattvabhūmi**

(W p.189; Du p.130; R 129b1; C 76b3; K 131a7; Tib D 101b6; Tib P 112b8; Ch 523a13; BBhV D 179a2)

5

uddānam pūrvavad<sup>1</sup> veditavyam, tad yathā ūlapaṭale.<sup>2</sup>

(1) < *kṣāntisvabhāva* >

10 tatra katamā<sup>3</sup> bodhisattvasya svabhāvaksāntih<sup>4</sup>. yā pratisamkhyānabalasamñiśrayenā vā prakṛtyā vā parāpakārasya marṣanā, sarveṣāṁ ca marṣanā sarvasya ca marṣanā nirāmiṣena ca<sup>5</sup> cittena kevalayā<sup>6</sup> karuṇayā marṣanā<sup>7</sup>, ayam samāsato bodhisattvasya kṣāntisvabhāvo<sup>8</sup> veditavyah.

15 (2) < *sarvakṣānti* >

tatra katamā bodhisattvasya sarvakṣāntih<sup>9</sup>. sā dvividhā draṣṭavyā gr̄hipakṣāśritā<sup>10</sup> pravrajitapakṣāśritā ca, sā punar ubhayapakṣāśritā<sup>11</sup> api trividhā veditavyā, (a) parāpakāra-marṣanākṣāntir<sup>11</sup> (b) duḥkhādhivāsanākṣāntir<sup>12</sup> (c) dharmanidhyānādhimokṣakṣāntis<sup>13</sup> ca.

<sup>1</sup> Du : pūrvad.

<sup>2</sup> Cf. BBh W p.137,1-8 (*Ūlapaṭala*): uddānam. svabhāvāś caiva sarvam̄ ca duṣkaram̄ sarvatomukham/ syāt sātpauruṣayuktam̄ ca sarvākāram̄ tathaiva ca// vighātārthikayuktam̄ ca ihamutrasukham tathā/ viśuddham̄ ca navākāram̄ ūlam̄ etat samāsatah // (= DāP 1\*,5-9, W 114,1-7). Ch 523a15-22: 云何菩薩忍波羅蜜多。嗚叱南曰。自性一切難。一切門善士。一切種求。二世樂清淨。如是九種相是名略說忍。謂九種相忍名爲菩薩忍波羅蜜多。一自性忍。二一切忍。三難行忍。四一切門忍。五善土忍。六一切種忍。七遂求忍。八此世樂忍。九清淨忍。Cf. DāP 1\*,13-16: navākāram̄ dānam̄ bodhisattvasya dānapāramitety ucyate. svabhāvadānam̄ sarvadānam̄ duṣkaradānam̄ sarvatomukham̄ dānam̄ satpuruṣadānam̄ sarvākāradānam̄ vighātārthikadānam̄ ihamutrasukham̄ dānam̄ viśuddhadānam̄ ca.

<sup>3</sup> C: katamād.

<sup>4</sup> Tib: bzod pa'i nō bo ūid.

<sup>5</sup> C, W om. ca.

<sup>6</sup> C: kevalatayā.

<sup>7</sup> R, K om. marṣanā.

<sup>8</sup> Tib: bzod pa'i nō bo ūid.

<sup>9</sup> Du : sarvā kṣāntih.

<sup>10</sup> R: gr̄ha-; K: gr̄hi-.

<sup>11</sup> Du : marpanā instead of marṣanā.

<sup>12</sup> R : duḥkhādhivāsanākṣāntih.

<sup>13</sup> Du : -dhimokṣa kṣāntiñ ca.

## (2)(a) &lt;parāpakāramarṣaṇākṣanti&gt;

tatra katham bodhisattvah parāpakāram marṣayati kṣamati. iha bodhisattvas tivre  
nirantare citre dīrghakālike 'pi parāpakāraje<sup>14</sup> duḥkhe saṃmukhībhūte<sup>15</sup> idam prati-

5 samṣikṣate<sup>16</sup>:

"svakarmāparādhā esa me<sup>17</sup>, yenāham svayamkrtaśyāśubhasya karmano duḥkham  
īdṛśam phalam pratyanyubhavāmi. duḥkhena cāham anarthī<sup>18</sup>, iyam cākṣāntir āyat�ām  
purar eva<sup>19</sup> duḥkhahetusthāniyā. so 'ham etam<sup>20</sup> duḥkhahetubhūtam dharmaṁ samādāya  
vartesyam<sup>21</sup>, addha<sup>22</sup> yan<sup>23</sup> mamaivāniṣṭam tenāham ātmānaivātmānam samyojayeyam.

10 ata ātmāna eva me 'pakṛtam syāt, na tathā pareṣām. svabhāvataś ca duḥkhapraktikā<sup>24</sup>  
eveme<sup>25</sup> sarvāsaṃskārah svaparasāntānikāḥ. tat pare tāvad ajñā ye 'smākam<sup>26</sup>  
praktiduḥkhitānām bhūyo duḥkham upasamharanti. asmākam tu vijñānām satām<sup>27</sup> na  
pratirūpam syād yad vayam api pareṣām prakṛtiduḥkhitānām bhūyo duḥkham  
upasamharemāḥ<sup>28</sup>. bhūyo 'pi cātmārthe tāvat prayuktānām<sup>(W190)</sup> śrāvakānām akṣāntir na  
15 yuktarūpā syāt svapareṣām duḥkhajanikā, prāg evāsmākam<sup>29</sup> tu parāthapravuktānām."

idam pratisamkhāya sa (Dul<sup>30</sup>) bodhisattvah pañcākārām samjñām bhāvayan  
mitrāmitrodāśinebhyo hīnatulyavisiṣṭebhyah sukhitaduḥkhitebhyo gunadoṣayuktebhyaś ca  
sattvebhyaḥ sarvāpakārāms<sup>29</sup> titikṣate.

20

<sup>14</sup> K: parāparāpakāraje.<sup>15</sup> W: prati samṣikṣate.<sup>16</sup> R,K: mama.<sup>17</sup> BBV: mi 'dod de for anarthī. Tib (D,P): mi bzod de for anarthī. Tib seems to be incorrect.<sup>18</sup> R,K,Du: api me instead of eva. C,W: eva. Tib: mi bzod pa 'di ni phyi ma la yaṇ sdug bṣñal gyi rgyu'i  
gnas su 'gyur la, Ch: 復爲當來大苦因處.<sup>19</sup> R,K,Du: etadduḥkha-.<sup>20</sup> R,K: varteya.<sup>21</sup> Du : yaddhā.<sup>22</sup> C,W om. yan. R,Du: yan. K: yamevāniṣṭam instead of yan mamaivāniṣṭam.<sup>23</sup> K: prakṛtika.<sup>24</sup> R: evame.<sup>25</sup> W om. asmākam. C: ?<sup>26</sup> R: santāna instead of satām na.<sup>27</sup> R,K om. h.<sup>28</sup> K: aivāsmākam. R,K om. tu.<sup>29</sup> R,K: sarvākārāpakārāms.

(2)(a) (x) < *pañca samjnāḥ* >

pañca samjnāḥ katamāḥ. (1)pūrvajanmasuhṛtsamjnā<sup>30</sup>, (2)dharmaṁtrānusāriṇī samjnā, (3)anityasamjnā<sup>31</sup>, (4)duḥkhasamjnā, (5)parigrahasamjnā ceti.

5 (2)(a) (x1) < *pūrvajanmasuhṛtsamjnā* >

katham ca bodhisattvo 'pakāriṣu sattveṣu<sup>32</sup> suhṛtsamjnām bhāvayati. iha bodhisattva idam pratisamśikṣate: “nāsau sattvah sulabharūpo yo me<sup>33</sup> na<sup>34</sup> dīrghasyādhvano<sup>35</sup> ‘tyayāt pūrvam anyasu jātiṣu mātā<sup>36</sup>vā abhūt pitā vā bhrātā vā bhaginī vā<sup>37</sup> ācāryo vā<sup>38</sup> upādhyāyo vā gurur vā gurusthāniyo vā”. tasyaivam<sup>39</sup> yoniśomanasikurvataḥ pratyarthikasamjnā<sup>40</sup> apakāriṣu sattveṣv antardhīyate suhṛtsamjnā ca samtiṣṭhate. sa tām suhṛtsamjnām niśritypakārān marṣayati kṣamate.

(2)(a) (x2) < *dharmaṁtrānusāriṇī samjnā* >

katham ca bodhisattvo 'pakāriṣu sattveṣu dharmamātrānusāriṇīm samjnām bhāvayati. iha bodhisattva idam pratisamśikṣate: “pratyayādhīnam idam saṃskāramātraṇa dharmamātrām. nāsty atra kaścid ātmā vā sattvo vā jīvo<sup>41</sup> vā jantur<sup>42</sup> vā, ya ākrośed<sup>43</sup> roṣayet<sup>44</sup> tādayed bhaṇdayet paribhāṣeta vā, yo vā punar<sup>45</sup> ākruṣyeta vā<sup>46</sup> roṣyeta vā tādyeta vā bhaṇdyeta vā paribhāṣyeta vā”. tasyaivam yoniśomanasikurvataḥ sattvasamjnā cāntardhīyate, dharmamātrasamjnā ca samtiṣṭhate. sa tām dharmamātrasamjnām niśrita<sup>47</sup> pratiṣṭhāya<sup>48</sup> parataḥ sarvāpakārān<sup>49</sup> marṣayati (W19) kṣamate.

<sup>30</sup> R.K: pūrvajanmasu suhṛtsamjnā.

<sup>31</sup> R om. anityasamjnā.

<sup>32</sup> C om. ū.

<sup>33</sup> Instead of me, R: ye, K: tma. Cf. Tib: bdag gi.

<sup>34</sup> C,W om. na. Cf. Tib: ... bla ma 'am bla ma lta bur ma gyur pa.

<sup>35</sup> K: dīrghasyāthano.

<sup>36</sup> C,W om. vā.

<sup>37</sup> K: tasyaiva.

<sup>38</sup> K: jāvo.

<sup>39</sup> R: jantu vā.

<sup>40</sup> Cf. MV 8708-8712: catvārah śramaṇakārakadharmaḥ. ākruṣtena na patyākroṣṭavyam, roṣitenā na pratiroṣṭavyam, bhaṇditenā na pratibhaṇdītavyam, tāditenā na pratitādītavyam.

<sup>41</sup> R: roṣyet.

<sup>42</sup> W om. punar.

<sup>43</sup> W om. vā.

<sup>44</sup> Du : niścītya.

(2)(a) (x3) < *anityasamjñā* >

kathar̄ ca<sup>47</sup> bodhisattvo 'pakāriṣu sattveṣ anityasamjñāṁ bhāvayati. iha bodhisattvo idam pratīṣṭhāpate<sup>48</sup> : “ye kecīt sattvā<sup>49</sup> jātā bhūtāḥ sarve te<sup>50</sup> anityā marañadharmaṇāḥ,  
 5 esa ca paramāḥ pratyapakāro<sup>51</sup> yad uta jīvitād vyaparopanām. evam ca prakṛtyā marañadharmaṇāḥ  
 10 prāg eva pāñinā<sup>52</sup> vā prahartum loṣṭena vā danḍena vā, prāg eva sarveṇa  
 sarvan̄ jīvitād vyaparopayitum”. tasyaivam yoniśomanasikurvato nityasārasamjñā<sup>53</sup> ca  
 prahṛiyate, anityasārasamjñā<sup>54</sup> ca samtiṣṭhate. sa tām api<sup>55</sup> anityasārasamjñā<sup>56</sup> niśritya  
 sarvāpakārān<sup>57</sup> marṣayati kṣamate.

(2)(a) (x4) < *duḥkhasamjñā* >

kathar̄ ca bodhisattvo 'pakāriṣu sattveṣ duḥkhasamjñāṁ bhāvayati. iha bodhisattvo  
 ye<sup>58</sup> tāvat sattvā mahat�ām api sampadi vartante tān api tisṛbhīr<sup>(Dul32)</sup> duḥkhatābhīr  
 15 anuṣaktān<sup>59</sup> paṣyati samskāraduḥkhatayā<sup>60</sup> vipariṇāmaduḥkhatayā duḥkhaduḥkhatayā ca  
 prāg eva vipattisthitān<sup>61</sup>. sa evam paṣyann idam pratīṣṭhāpate<sup>62</sup> : “evam sada<sup>63</sup>  
 duḥkhānugatānām sattvānām duḥkhāpakarsaṇāyāsmābhīr<sup>64</sup> vyāyantavyam<sup>65</sup> na duḥkho-

<sup>45</sup> R,C,W: pratiṣṭhāya. K: pratiṣṭhāpayataḥ instead of pratiṣṭhāpya parataḥ.

<sup>46</sup> W: sarvāpakāram. R,K,Du: sarvāpakārān. C: ?

<sup>47</sup> C,W om. ca.

<sup>48</sup> W: idam prati samīkṣate.

<sup>49</sup> R: sattva.

<sup>50</sup> R: pratyaparo; Du : pratyatakāro.

<sup>51</sup> K om. m.

<sup>52</sup> R: pāñino.

<sup>53</sup> Du om. m.

<sup>54</sup> K,W: anityasārasamjñā. Tib: mi rtag pa dañ sñiñ po med pa ī 'du śes ni. Ch: 無常不堅固想.

<sup>55</sup> W om. api.

<sup>56</sup> K : -samjñān.

<sup>57</sup> C,W: sarvaparāpakārām. Tib: gnod pa thams ca la.

<sup>58</sup> K: ya. C,W: ye 'pi.

<sup>59</sup> C,W: anuṣaktān.

<sup>60</sup> R : -duḥkhatayāḥ.

<sup>61</sup> C,W: vipattisthitān.

<sup>62</sup> W: idam prati samīkṣate.

<sup>63</sup> C: satān (or sabhān?) duḥkhānugatām..

<sup>64</sup> R,K : duḥkhāpakarsaṇāyāsmābhīr.

pasam̄hārāya". tasyaivam̄ yoniśomanasikurvataḥ sukhasam̄jñā prahīyate duḥkhasam̄jñā cotpadyate. sa tāṁ duḥkhasam̄jñāṁ niśṛitya pareśāṁ sarvāpakārāṁ<sup>66</sup> marṣayati kṣamate.

(2)(a) (x5) <parigrahasam̄jñā>

- 5        kathaṁ ca bodhisattvo 'pakāriṣu sattveṣu parigrahasam̄jñāṁ bhāvayati. iha bodhisattva idam̄<sup>67</sup> pratīsam̄śiksate : "mayā khalu sarvasattvā bodhāya cittam utpādayatā<sup>(W192)</sup> kaḍatrabhāvena parighītāḥ "sarvasattvāṁ mayārthaḥ<sup>68</sup> karanīya" iti, tan na me pratiṛūpaṁ syād yad aham evam̄ sarvasattvā upādāya<sup>69</sup> ^ "eśāṁ arthaṁ karisvāmīty anartham eva kuryām apakāram<sup>70</sup> amarṣayan". tasyaivam̄ yoniśomanasikurvato<sup>71</sup>
- 10      'pakāriṣu sattveṣu parasam̄jñā prahīyate, parigrahasam̄jñā ca<sup>72</sup> samīṭhate. sa tāṁ parigrahasam̄jñāṁ niśṛitya pareśāṁ sarvāpakārāṁ<sup>73</sup> marṣayati kṣamate.

kṣāntīḥ katamā. yan na<sup>74</sup> kupyati na pratyapakāraṇ karoti nāpy anuśayam̄ vahati<sup>75</sup>, iyam ucyate kṣāntīḥ.

15

(2)(b) <duḥkhādhivāsanākṣānti>

tatra bodhisattvasya duḥkhādhivāsanākṣāntīḥ<sup>76</sup> katamā. iha bodhisattva idam̄<sup>77</sup> pratīsam̄śiksate : "mayā khalu pūrvam̄ kāmacaryāsu vartamānena kāmān<sup>78</sup> paryeṣatā<sup>79</sup> pratīsam̄khyāya duḥkhāhetutayā<sup>80</sup> duḥkhātmakānām<sup>81</sup> kāmānām arthe prabhūtāni tīvrāṇi

<sup>65</sup> R: vyāyacchitavyan; K: vyāyacchitavya; Du : vyāyacchitavyam.

<sup>66</sup> C,W: sarvāpakārām.

<sup>67</sup> W: idam̄ prati sam̄śiksate.

<sup>68</sup> C om. h.

<sup>69</sup> K om. dā.

<sup>70</sup> R: apakāraṇ apakarṣayaṇ tasyaivam̄ ... ; K: apakāraṇ amarṣayaṇ tasyaivam̄ ...

<sup>71</sup> K : -manasikurvan ta apakāriṣu.

<sup>72</sup> C,W om. ca.

<sup>73</sup> K om. pa. C,W: sarvāpakārām.

<sup>74</sup> K: yatra instead of yan na.

<sup>75</sup> W : nāpy anuśayavahaniyam instead of nāpy anuśayam̄ vahati, Tib: sems la yañ khon du mi 'dsin pa, Ch: 不離眠流注恒續。

<sup>76</sup> C: adhivāsanākṣāntīḥ.

<sup>77</sup> W: idam̄ prati sam̄śiksate.

<sup>78</sup> C,W: kāmān.

<sup>79</sup> C,W: paryeṣamāṇena.

<sup>80</sup> C: duḥkhaduḥkhāhetutayā.

<sup>81</sup> K om. m̄.

duḥkhāny abhyupagatāny<sup>82</sup> adhivāsitāny anubhūtāni <sup>83</sup>kr̄ṣīvanijyārājapuruṣyaprayuktena. evam̄ tad vyartham̄ duḥkhasyaivārthe mayā mahad duḥkham abhyupagataṁ pratisaṁkhyāyajñānadoṣena<sup>84</sup>. sāmpratam̄ tu mama sukhāharake kuśale prayuktasya pratisaṁkhyāya<sup>85</sup> tataḥ<sup>86</sup> koṭīśatasahasraguṇasya duḥkhasyādhivāsanābhypagamah̄ pratirūpah̄<sup>87</sup>

5 syāt, prāg eva tato nyūnasya.” evam̄ yoniśomanasikurvan<sup>88</sup> bodhāya prayukto bodhi-sattvah̄ sarvavastukam̄ duḥkham<sup>89</sup> adhivāsayati.

## (2)(b) (y)

sarvavastukam̄ duḥkham̄ katamat. tat samāsatāḥ aṣṭakāram̄ veditavyam. (1)  
 10 samīśrayādhiṣṭhānam̄ (2)lokadharmādhiṣṭhānam̄ (3)īryāpathādhiṣṭhānam̄ (4)dharma-parigrahādhiṣṭhānam̄<sup>90</sup> (5)bhiksākavṛttādhiṣṭhānam̄ (6)abhiyogaklamādhiṣṭhānam̄ (7)sattvārthakriyādhiṣṭhānam̄ (8)itikaranāyādhiṣṭhānam̄<sup>(W199)</sup> ceti.

(2)(b) (y1) < samīśrayādhiṣṭhānam̄ duḥkham̄ > (Du 133)

15 catvāraḥ samīśrayāḥ<sup>91</sup>, yān āśritya svākhyāte dharmavinaye<sup>92</sup> pravrajyopasampad-bhikṣubhāvah. tad yathā cīvaraṁ<sup>93</sup> piṇḍapātah̄ śayanāsanam̄ glānapratyayabhaiṣajya-pariskārāś ca. tair bodhisattvo lūhāḥ stokair asatkṛtya dhandham̄<sup>94</sup> ca labdhair notkanthhyate na paritrasyati<sup>95</sup> nāpi tato niḍānam̄ vīryam̄ srāmsayati<sup>96</sup>. evam̄ samīśrayādhiṣṭhānam̄<sup>97</sup> duḥkham adhivāsayati.<sup>98</sup>

<sup>82</sup> K: abhyupagatānām̄.<sup>83</sup> K: kr̄ṣīvanijyā-.<sup>84</sup> R: pratisaṁkhyājñānadoṣena, K: pratisaṁkhyā 'jñānadoṣena..<sup>85</sup> C reads pratisaṁkhyāya tataḥ twice.<sup>86</sup> K: koṭīśata-.<sup>87</sup> R; K om. pratirūpah.<sup>88</sup> C,W: yoniśo(K:śa)amanasikurvam.<sup>89</sup> Tib: gži thams cad las byuñ ba 'i sdug bsñal.<sup>90</sup> R om. dharmaparigrahādhiṣṭhānam̄. Tib: chos yoñis su 'dsin pa la brten pa dañ; Ch: 撮法處苦.<sup>91</sup> K om. yāh. C,W: catvāro niśrayāḥ, yān niśritya. Tib: gnas ni gži ste/ gañ la brten nas.<sup>92</sup> R: pravrajyā / upasampadbhikṣu-; K,C: pravrajyā upasampadbhikṣu-. Tib: rab tu byuñ žiñ bsñen par rdsogs te/dge sloñ gi dños por 'gyur ba 'di ita ste.<sup>93</sup> K,W: cīvarapīṇḍapātāśayanāsanam; C: cīvarapīṇḍapātāśayanāsane glānapratyaye.<sup>94</sup> R,K: vandham; C: ? Tib: brgyaiñ pas. C om. ca.<sup>95</sup> R,K,Du,W: paritasayati; C: ?. Tib: yoñis su yi(yid:P) chad par mi 'gyur la.<sup>96</sup> K: saṃsayat� evam̄. Tib: brtson 'grus kyañ gtoñ bar mi byed pa ste.<sup>97</sup> R,Du: sannīśrityādhiṣṭhānam̄. K: sannīśrayā\_ \_ \_ duḥkham.<sup>98</sup> Ch: 如是名爲菩薩忍受依止處苦.

(2)(b) (y2) < *lokadharmādhīṣṭhānam duḥkham* >

nava lokadharmāḥ. (i)alābhāḥ, (ii)ayaśāḥ, (iii)nindā, (iv)duḥkham, (v)nāśadharma-kasya<sup>99</sup> nāśāḥ, (vi)ksayadharma-kasya ksayah, (vii)jarādharma-kasya jarā, (viii)vyādhi-dharma-kasya vyādhiḥ, (ix)maraṇadharma-kasya maraṇam.

esāṁ lokadharmāṇāṁ samastavyastānāṁ āpatanāt<sup>100</sup> sammukhībhāvād yad duḥkham utpadyate tal “lokadharmādhīṣṭhānam” ity ucyate. tenāpi spr̄sto<sup>101</sup> bodhisattvo na tannidānam vīryam srāmsayati pratisaṃkhyāyodvahate ‘dhivāsayati.<sup>102</sup>

10 (2)(b) (y3) < *īryāpathādhīṣṭhānam duḥkham* >

catvāra īryāpathāḥ. <sup>103</sup>(i)caṃkramah (ii)sthānam (iii)niṣadyā (iv)śayyā ca. tatra bodhisattvaś caṃkramaniṣadyābhyaṁ divā rātrau vā<sup>104</sup> ^ āvaraṇīyebhyo dharmebyaś cittam pariśodhayat tannidānam pariśramajam duḥkham adhivāsayati. na tv akāle pārśvam anuprayacchati mañice vā pīthe vā trṇasamstare vā parṇasamstare vā.<sup>105</sup>

15

(2)(b) (y4) < *dharma-parigrahādhīṣṭhānam duḥkham* >

saptavidho<sup>106</sup> dharma-parigrahaḥ. (i)ratnatrayapūjopasthānam<sup>107</sup> (ii)gurupūjopasthānam<sup>108</sup> (iii)dharmaṇām udgrahaṇam (iv)udgr̄hītānām pareṣām vistareṇa deśanā (v) vistareṇa svareṇa<sup>109</sup> svādhyāyakriyā (vi)ekākino rahogatasya samyak<sup>110</sup> cintanā tulanā<sup>111</sup> upapariṣṭanā (vii)yogamanasikārasaṃgr̄hitā ca<sup>111</sup> śamathavipaśyanā bhāvanā.

20 asmin saptākāre dharma-parigrahe<sup>(W194)</sup> bodhisattvasya vyāyacchamānasya yad

<sup>99</sup> R,K: naśatadharmakasya.

<sup>100</sup> C,W: āpatāṁ. K: ayatanān saṃmukhībhāvān. Tib: so sor 'on žin mñon du gyur ba las; Ch: 會遇現前.

<sup>101</sup> R: pr̄sto. Ch: 觸對.

<sup>102</sup> Ch adds 如是名爲菩薩忍受世法處苦.

<sup>103</sup> C,W om. caṃkramah sthānam niṣadyā śayyā ca tatra bodhisattvaś.

<sup>104</sup> C,W om. vā.

<sup>105</sup> Ch adds 菩薩於此疲所生苦悉能忍受不由此緣精進懈廢如是名爲菩薩忍受威儀處苦.

<sup>106</sup> K: saptavidhā.

<sup>107</sup> R,K om. traya. Tib: dkon mchog gsum la; Ch: 三寶.

<sup>108</sup> R om. gurupūjopasthānam.

<sup>109</sup> R,K om. svareṇa. Tib: gsañ bstod de kha ton du bya ba ; Ch: 以大音聲吟詠讚誦. Tib & Ch have no equivalent to vistareṇa<rgya cher;廣>.

<sup>110</sup> W: samyak-cintanā-tulanā-upapariṣṭanā.

<sup>111</sup> All: -saṃgr̄hitā śamathavipaśyanā bhāvanā ca.

duḥkham utpadyate tad apy asāv<sup>112</sup> adhvāsayati, na ca<sup>113</sup> tannidānam vīryam<sup>114</sup> srāmsayati.

(2)(b) (y5) < *bhiksākavṛttādhīṣṭhānam duḥkham* >

5 bhiksākavṛttam api saptakāram veditavyam. (i)vairūpyābhypagamaḥ śirastundā-  
munḍanādibhir<sup>115</sup> apahṛtagṛhivyañjanatayā, (ii)vaivarṇyābhypagamo vikṛtavivarṇavastra-  
dhāranatayā, (iii)ākalpāntarakriyā sarvalaukikapracāreṣu yantritavihāratayā<sup>116</sup>, (iv)para-  
pratibaddhājīvīkā kṛṣyādikarmāntavivartijasya paralabdhenā yātrākalpanatayā, (v)yāvaj-  
jīvām parataś cīvaraḍiparyeṣaṇā<sup>117</sup> labdhānām<sup>118</sup> <sup>119</sup> saṃnidhikārāparibhogatayā, (Du<sup>124</sup>)  
10 (vi)yāvajjīvām mānuṣyakebhyaḥ kāmēbhya<sup>120</sup> āvaraṇakriyā<sup>^</sup> abrahmacaryamaithuna-  
dharma prativiramaṇatayā<sup>121</sup>, (vii)yāvajjīvām mānuṣyakābhyo<sup>122</sup> ratikṛīḍabhyā āvaraṇa-  
kriyā<sup>123</sup> naṭanartanakahāsakālāsaṅkādisaṁḍarśanaprativiramaṇatayā mitrasuhṛdvayasyaiś  
ca saha hasitakṛīḍitarāmitaparicāritaprativiramaṇatayā.

ity evamṛūpam kṛcchrasaṁbādham bhiksākavṛttam āgamyā yad duḥkham utpadyate  
15 tad api bodhisattvo 'dhivāsayati, na ca tannidānam vīryam<sup>124</sup> srāmsayati.

(2)(b) (y6) < *abhiyogaklamādhīṣṭhānam duḥkham* >

kuśalapakṣābhiyuktasyāpi ca bodhisattvasya<sup>125</sup> ye pariśramanidānā utpadyante kāyikāḥ  
klamāś caitasikā apy<sup>126</sup> upāyāsāḥ tān apy adhvāsayati<sup>127</sup>, na ca<sup>128</sup> bodhisattvas tannidānam

<sup>112</sup> C,W om. asāv. Tib: n.e.

<sup>113</sup> R,K om. ca. C: katamannidānam instead of na ca tannidānam. Tib: gži des brtson 'grus gton bar mi byed do (= na tannidānam vīryam srāmsayati). Cf. (2)(b) (x) (2), etc.).

<sup>114</sup> K om. m.

<sup>115</sup> C om. bhi.

<sup>116</sup> R: yantritavihāratayā, K,C,W: yantritavihāratayā. Tib: gdams nas gnas pa'i phyir. Cf. Ch: 三者進止云爲皆不縱任遊涉世間一切行住自競攝故。

<sup>117</sup> R om. di. W: parataḥ cīvaraḍi.

<sup>118</sup> K: paralavena.

<sup>119</sup> R,K : saṃnidhikārā-.

<sup>120</sup> C om. kāmēbhya.

<sup>121</sup> Du: -prativivaraṇa- instead of -prativiramaṇa-.

<sup>122</sup> C,W,Du: mānuṣyakebhyo. C: ratikṛīḍāvaraṇakriyā(?)

<sup>123</sup> W: naṭanartakahāsaka.

<sup>124</sup> K om. m.

<sup>125</sup> R: bodhisattvayepariśrama-; C,K: bodhisattvasya ye pari-; W: bodhisattvaya ye pari-; Du: bodhisattvasya [ye] pari-. Tib: gan dag byuñ ba yai (ye ... utpadyante).

<sup>126</sup> R: abhy instead of apy.

vīryam<sup>129</sup> sram̄sayati.

(2)(b) (y7) < sattvārthakriyādhishṭhānam duḥkham >

5 sattvārthakarma<sup>130</sup> tv ekādaśaprakāraṇ pūrvavad veditavyam. tannidānam api bodhisattvo duḥkham samutpannam<sup>131</sup> adhivāsayati, na<sup>132</sup> ca tannidānam vīryam<sup>133</sup> sram̄sayati / (W195)

(2)(b) (y8) < itikaranīyādhishṭhānam duḥkham >

10 itikaranīyam<sup>134</sup> pravrajitasya cīvarapātrakarmādi, gr̄hiṇah punah<sup>135</sup> samyakkṛṣivanijjyā- rājapauruṣyādi. tannidānam api bodhisattvo duḥkham adhivāsayati, no tu tannidānam vīryam<sup>136</sup> sram̄sayati.

15 yat punar bodhisattvah spr̄ṣṭah sann anyatamena duḥkhena prayujyata evānuttarāya<sup>137</sup> samyaksambodhaye, na na prayujyate<sup>138</sup>, prayuktaś ca na nivartate<sup>139</sup>, avimanaskaś<sup>140</sup> cāsamkliṣṭacittah prayujyate.

iyam asyocaye (2)(b) duḥkhādhivāsanāksaṇtiḥ<sup>141</sup>.

(2)(c) < dharmanidhyānādhimoksaksānti >

tatra katamā bodhisattvasya dharmanidhyānādhimuktiksāntiḥ. iha bodhisattvasya

<sup>127</sup> R,C,K,W,Du do not read tān apy adhivāsayati, which we have added by referring to Ch: 悉能忍受. Tib has no equivalent, but reads gan̄ dag byun ba yah (= ye ... utpadyante. See our previous note above.) in the former part of the passage. See also the passages in the previous sections, i.e.(2)(b)(x)(5), etc.

<sup>128</sup> R,W,Du do not read ca, which we have added.

<sup>129</sup> Kom. m. Du: saṃstrayati.

<sup>130</sup> C: sattvārthadharma. R: sattvārthakarmā(?).

<sup>131</sup> R,Du: duḥkhasamutpannam.

<sup>132</sup> C: katamannidānam instead of na ca tannidānam.

<sup>133</sup> Kom. m. Du: stramsayati.

<sup>134</sup> Rom. m. Ch adds 諸菩薩, and reads: 諸菩薩或是出家便 .... 或是在家便 ....

<sup>135</sup> R: samakkṛṣi-

<sup>136</sup> Kom. m.

<sup>137</sup> K: anuttarāsamyaksambodhaye.

<sup>138</sup> R reads na once only. Tib: mi 'jug par ni mi byed la. Cf. W 200,20-21 (Vīryapāṭala): na nānuttarāyāḥ samyaksambodher arthena prayujyeyam.

<sup>139</sup> Du: vivartante. Tib: ldog par mi byed ciñ, Ch: 能無退轉忍.

<sup>140</sup> K: adhimanaśkaś.

<sup>141</sup> C,K,W om. ksāntiḥ. Tib & Ch read bzod pa & 忍.

samyagdharma pravicyasuvicāritayā buddhyā<sup>^</sup> aṣṭavidhe<sup>142</sup> vimuktyadhiṣṭhāne 'dhimuktih susamniviṣṭā bhavati, <sup>(1)</sup> ratnaguṇeṣu <sup>(2)</sup> tattvārthe<sup>143</sup> <sup>(3)</sup> buddhabodhisattvānām mahāprabhāve <sup>(4)</sup> hetau <sup>(5)</sup> phale <sup>(6)</sup> prāptavye 'rthe<sup>^</sup> ātmanas <sup>(7)</sup> tatprāptyupāye <sup>(8)</sup> jñeyagocare ca. sā punar adhimuktir dvābhāyām kāraṇābhāyām susamniviṣṭā bhavati. dīrghakālābhāyāsataś ca  
5 suviśuddhajñānasamudāgamataś<sup>144</sup> ca.

itiyām bodhisattvānām sarvakṣāntih paksadvayāśritā<sup>145</sup>, tām āśritya duṣkara-kṣāntyādīvistaravibhāgo bodhisattvānām veditavyah.

10 (3) <duṣkarakṣānti>

tatra katamā bodhisattvasya duṣkarakṣāntih. sā trividhā draṣṭavyā. (i) iha bodhisattvo durbalānām sattvānām antikād apakāram kṣamate.<sup>146</sup> iyām prathamā<sup>147</sup> duṣkarakṣāntih. (ii) prabhuḥ bhūtvā svayam kṣamate.<sup>148</sup> iyām dvitīyā duṣkarakṣāntih<sup>149</sup>. (iii) jātigotranīcitarānāñ ca sattvānām antikād utkṛṣṭam adhimātram apakāram kṣamate.<sup>150</sup>  
15 iyām tṛtīyā duṣkarakṣāntih.

(4) < sarvatomukhī kṣāntih >

(<sup>Du<sup>151</sup></sup>) tatra katamā bodhisattvasya sarvatomukhī kṣāntih. (<sup>W<sup>152</sup></sup>) sā caturvidhā draṣṭavyā. (i) iha bodhisattvo mitrād apy apakāram<sup>151</sup> kṣamate, (ii) amitrād api, (iii) udāśinād api, (iv) tebhyaś ca tribhyo hīnatulyādhikebhyah kṣamate.

(5) < satpuruṣakṣānti >

<sup>142</sup> C,W,Du: adhimuktyadhiṣṭhāne. K: aṣṭavidhavimuktyadhiṣṭhāne. R: vimuktyadhiṣṭhāne. Tib: mos pa'i gnas mam pa brgyad po. Ch: 於八種生勝解處。

<sup>143</sup> C: tattvārtha.

<sup>144</sup> K omits from samudāgamataśca to the end of (7)<vighātārthikakṣāntih>.

<sup>145</sup> C,W,Du: paksadvayam āśritā yām āśritya. R: pakṣadvayāśritā/ s(m?)āmāśritya. Tib: phyogs mam pa gñis la brten pa'i bzod pa thams cad de, de la brten nas ...

<sup>146</sup> Ch: 諸菩薩能於贏劣諸有情所忍彼所作不饒益事。

<sup>147</sup> C: pramathā.

<sup>148</sup> Ch: 若諸菩薩居尊貴位於自臣隸不饒益事堪能忍受。

<sup>149</sup> C om. h.

<sup>150</sup> Ch: 若諸菩薩於其種姓卑賤有情所作增上不饒益事堪能忍受。

<sup>151</sup> C: apy akapakāram(?)

tatra katamā bodhisattvasya satpuruṣakṣāntih<sup>152</sup>. sā pañcavidhā<sup>153</sup> draṣṭavyā. iha bodhisattva ādita eva (i) kṣāntāv anuśāmsadarśī bhavati<sup>154</sup> : “kṣamah pudgala āyat�ām<sup>155</sup> avairabahulo bhavaty abhedabahulo bhavati sukhasaumanasyabahulo bhavaty avipratisārī kālam karoti, kāyasya ca<sup>156</sup> bhedāt sugatau svargaloke deveśūpapadyata” iti. sa evam 5 anuśāmsadarśī. (ii) svayam ca kṣamo bhavati, (iii) param ca<sup>157</sup> kṣāntau samādāpayati<sup>158</sup>, (iv) kṣamāyāś ca varṇam<sup>159</sup> bhāṣate, (v) kṣamiṇam ca pudgalam drṣṭvā sumanasko bhavaty ānandijātah.

(6) < *sarvākārakṣānti* >

10 tatra katamā bodhisattvasya sarvākārakṣāntih<sup>160</sup>. sā ṣaḍvidhā saptavidhā ca, ekadhyam abhisamkṣipyā trayodaśavidhā veditavyā.  
 (i) iha bodhisattvo 'niṣṭāvipākām<sup>161</sup> aksāntim viditvā bhayād api kṣamate. (ii) sattveṣu ca<sup>162</sup> dayācittah kārunyacittah snigdhacittah<sup>163</sup> snehād api kṣamate. (iii) anuttarāyām samyakṣambodhau tivrachandah kṣāntipāramitām paripūrayitukāmaḥ kāraṇahetor api 15 kṣamate. (iv) kṣāntibalāś ca pravrajitā uktā bhagavatā, tad anenāpi paryāyena na yuktarūpā samāttāśilasya pravrajitasyākṣāntir<sup>164</sup> iti dharmasamādānato 'pi kṣamate. (v) gotrasampadi pūrvake ca kṣāntyabhyāse<sup>165</sup> vartamāno 'vasthitah prakṛtyāpi kṣamate. (vi) 166 niḥsattvāṁś ca sarvadharmān viditvā<sup>167</sup> nirabhilāpyadharmaṁātradarśī dharma-nidhyānato 'pi kṣamate.

<sup>152</sup> R: satpurukṣāntih.

<sup>153</sup> W: pañcākārā.

<sup>154</sup> R om. ti.

<sup>155</sup> Du: āyat�ām.

<sup>156</sup> C, W om. ca.

<sup>157</sup> C om. ca.

<sup>158</sup> C: samādopayati.

<sup>159</sup> C: vajram.

<sup>160</sup> R: sarvākārā kṣāntih. C om. h.

<sup>161</sup> Du: -vipākam.

<sup>162</sup> C, W om. ca.

<sup>163</sup> R om. snigdhacittah. Ch: 有親愛心。 Cf. Tib: gñen po'i sems kyi.

<sup>164</sup> R: pravrajitasya kṣāntir. Tib: bzod pa med pa ni rigs pa'i tshul ma yin pas ...

<sup>165</sup> C: kṣāntyabhyāse, W: kṣāntyā 'bhyaṣe. Tib: sñon bzod pa goms par byas pa la gnas śin 'dug pas ...

<sup>166</sup> R omits nih, and reads: sattvāṁś ca. Tib: chos thams cad la sems can med par rig nas, Ch: 知一切法遠離有情。

<sup>167</sup> R: nirabhilāpyāndharmaṁātradarśī, C: nirabhilāpyadharmaṁātradarśī. Tib: brjod du med pa'i chos tsam du mthoṇ pas, Ch: 唯見諸法無戲論性。

<sup>168</sup>(i') sarvam cāpakāram kṣamate. (ii') sarvataś <sup>(w197)</sup> ca kṣamate. (iii') sarvatra ca deśe kṣamate, rahasi vā mahājanasamakṣam vā. (iv') sarvakālam ca <sup>169</sup> kṣamate, pūrvāhne 'pi madhyāhne 'pi sāyāhne 'pi, rātrau ca <sup>170</sup> divā vā<sup>^</sup> afitam apy anāgatam api pratyutpannam api, glāno 'pi svastho 'pi patito 'py utthito<sup>171</sup> 'pi. (v') kāyenāpi kṣamate 'praharaṇatayā. (vi') vācāpi kṣamate 'manāpavacanāniścāraṇatayā. (vii') manasāpi kṣamate 'kopyatayā kaluṣāśayādhāraṇatayā ca.

(7) < *vighātārthikakṣānti* >

tatra katamā bodhisattvasya vighātārthikakṣāntih. sa<sup>^</sup> aṣṭavidhā draṣṭavyā.

- 10 (i) duḥkhitānām <sup>172</sup> yācakānām antikād <sup>173</sup> yāñcoparodhanakṣāntih. (ii) raudreṣ adhimātrapākarmasūtveṣu dharmamahākarunām niśritya<sup>^</sup> āghātākaraṇakṣāntih. (iii) duḥśileṣu pravrajiteṣu <sup>(Dw136)</sup> dharmamahākarunām niśritya<sup>^</sup> āghātākaraṇakṣāntih<sup>174</sup>.  
 pañcākārā ca vyavasāyasahiṣṇutākṣāntih. (iv) duḥkhitānām sattvānām duḥkhā-panayāya <sup>175</sup> vyāyacchataḥ, (v) dharmān <sup>176</sup> paryeṣataḥ, (vi) dharmasyānudharmaṁ <sup>177</sup> 15 pratipadyamānasya<sup>178</sup>, (vii) tān eva dharmān pareṣām vistareṇa samprakāśayataḥ<sup>179</sup>, (viii) sattvakṛtyeṣu sattvakaraṇīyeṣu<sup>180</sup> ca <sup>181</sup> samyaksahāyībhāvam gacchataś ca <sup>182</sup> vyavasāya-sahiṣṇutā.

itiyam aṣṭākārā vighātārthikakṣāntir<sup>183</sup> ity ucyate. yena ca sattvā vighātinah syuḥ tasya ca kṣāntyā parivarjanāt, yena cārthinas tasyopasamhārāt.

<sup>168</sup> Ch adds 云何七種.

<sup>169</sup> C,W om. ca.

<sup>170</sup> C,W om. ca.

<sup>171</sup> C,W: ucchrīto instead of utthito. For patito 'py utthito 'pi, Tib: rgyud pa dañ dar ba; Ch: 若臥若起。

<sup>172</sup> W: duḥkhitayācakānām. C: ?.

<sup>173</sup> Du: yāñcoparodhana-.

<sup>174</sup> C: āghātākaraṇakṣāntih. Tib: kun nas mnar sems mi byed pa'i bzod pa.

<sup>175</sup> W: duḥkhāpanayānāya.

<sup>176</sup> R: dharmāvyaryeṣataḥ; C,W: dharmān paryeṣataḥ.

<sup>177</sup> Du: dharmasyānudharma.

<sup>178</sup> Du: pratipadyabhānasya.

<sup>179</sup> C,W om. sam.

<sup>180</sup> R om. sattvakaraṇīyeṣu. Tib: sems can gyi don byed pa mams dañ sems can gyi bya ba mams la for sattvakṛtyeṣu sattvakaraṇīyeṣu.

<sup>181</sup> C,W om. ca.

<sup>182</sup> R,Du: yā instead of ca. C: gatoya instead of gacchataś ca. Tib: .... btsal ba la mi brjed pa (=vyavasāyasahiṣṇutā) gañ yin pa de ni phoñis śin' 'dod pa mam pa bryad ces bya ste.

<sup>183</sup> C: vighātārthikā kṣāntir.

(8) < *ihāmutrasukhā kṣāntīḥ* >

- <sup>184</sup>tatra katamā bodhisattvasya<sup>^</sup> ihāmutrasukhā kṣāntīḥ. sā navavidhā dr̄ṣṭavyā. (i) iha bodhisattvo 'pramatto viharan kuśaleṣu dharmeṣu kṣamo bhavati<sup>185</sup>. (ii) śītasyoṣṇasya<sup>186</sup> 5 (iii) jighatsāpīpāsayoh (iv) daṁśasam̄sparsānām<sup>187</sup> maśakasam̄sparsānām (v) vātātāpayoh (vi)<sup>188</sup> sarīrāpam̄sparsānām<sup>188</sup> kṣamo bhavati. (vii) (viii) pariśramajasya<sup>189</sup> kāyacittaklamopāyāsasya kṣamo bhavati. (ix) samsārapatitānām<sup>190</sup>jātijarāvyādhimaraṇādikānām duḥkhānām sattvānukampām eva sampuraskṛtya<sup>191</sup>.
- ity evam kṣamo bodhisattva ātmanā ca dr̄ṣṭe<sup>192</sup> dharme sukhasam̄sparsām<sup>193</sup> viharaty 10 avyavakīṇah<sup>194</sup> pāpākair akuśalair dharmaih, sāmparāyikam ca sukhahetuṁ samādāya vartate,<sup>195</sup> pareśām api ca dr̄ṣṭadharmaśāmparāyāsukhāya<sup>196</sup> pratipanno bhavati. tasmād iyam “ihāmutrasukhā kṣāntīr” ity ucyate.

(9) < *viśuddhā kṣāntīḥ* >

- 15 tatra katamā bodhisattvasya viśuddhā kṣāntīḥ<sup>197</sup>. sā daśavidhā draṣṭavyā. iha bodhisattvaḥ pareśām antikād apakāram vighātam vyatikramam ca<sup>198</sup> labhamāno (i) nāpi pratyapakāram<sup>199</sup> karoti, (ii) nāpi manasā kupyati, (iii) nāpi pratyarthikāśayam vahati, (iv)

<sup>184</sup> Hereafter K (136b3-) is available to us again.<sup>185</sup> Tib: bag yod par dge ba'i chos mams la gnas pa na (nas:P) sems can mams la sñiñ brtse ba ñid btso bor byas te (= sattvānukampām eva sampuraskṛtya. See several lines below in the text.). Ch: 諸菩薩住不放逸於諸法悉能堪忍。<sup>186</sup> K: sāta instead of śīta.<sup>187</sup> C: daśa- instead of daṁśa-. R omits last m, and omits maśakasam̄sparsānām.<sup>188</sup> R: śāriyāpam̄sparsānām.<sup>189</sup> Du: pariśramajanyāyacittaklamopāyāsasya. C,W: kāyika instead of kāya. Tib: ḡal ba las byuñ ba'i lus dañ sems dub pa dañ 'khrug pa bzod pa.<sup>190</sup> R,K,Du omit jāti, and read samsārapatitarāvyādhimaraṇādikānām duḥkhānām. Tib: 'khor ba na yod pa'i skye ba dañ rga ba dañ na ba dañ 'chi ba la sogs pa'i sdug bsrial mams bzod pa ste. Ch: 於墮生死老病死等苦有現情前哀愍而修行忍。<sup>191</sup> R,K,Du omit sam̄, and R,K: puraskṛtya, Du: puraskṛtā.<sup>192</sup> R,Du: ātmanā ca dr̄ṣṭe ca dharme.<sup>193</sup> C,W: sukhām̄ sparsām̄.<sup>194</sup> Kom. nya.<sup>195</sup> C,W here adds: pareśām api ca sukhahetuṁ samādāya vartate. R,K,Du,Tib,Ch: n.e.<sup>196</sup> R,K,Du: dr̄ṣṭe dharme samparāyā sukhāya. Tib: tshe 'di dañ tshe phyi ma la bde bar bya ba'i phyir.<sup>197</sup> C om. h.<sup>198</sup> All omit ca. Tib: gnod pa dañ phoñs pa dañ 'gal bar byas pa na.<sup>199</sup> R: pratyakāraṇī. Tib: gnod par yañ mi byed pa.

upakārāya<sup>200</sup> cābhīmukho bhavati yathā pūrvam̄ tathā paścāt, (v) <sup>201</sup>nopakārakriyayā<sup>^</sup>  
 apakārtāram upekṣate, apakāriṣu ca svayam eva samjñaptim anupracyacchati, (vi) na ca  
 khedayitvā pareṣām antikāt samjñaptim<sup>202</sup> pratigrhaṇātī “khedito bhavatv<sup>203</sup> ” iti. (vii)  
 etam eva pratyayam kṛtvā<sup>^</sup> aksāntim ārabhya tīvreṇa hrīvyapatrāpyeṇa<sup>204</sup> samanvāgato  
 5 bhavati. (viii) kṣāntim ārabhya tīvreṇa śāstari premagauraveṇa samanvāgato bhavati.  
 (ix) sattvāvihethanatām ārabhya tīvreṇa sattveṣu karuṇāśayena samanvāgato bhavati. (x)  
 sarveṇa vā sarvam<sup>205</sup> aksāntidharmasahāyam̄ prahāya kāmavītarāgo bhavati. sarveṇa<sup>206</sup>  
 ebir daśabhir ākārair bodhisattvasya<sup>207</sup> kṣāntir viśuddhā veditavyā nirmalā.

(Du 137)

10 ity etām svabhāvaksāntyādikām̄<sup>208</sup> viśuddhakṣāntiparyavasānām̄ kṣāntim̄ vipulām̄  
 apramāṇām̄ mahābodhiphalodayām̄<sup>(W199)</sup> niḥśritya<sup>209</sup> bodhisattvo 'nuttarām̄ samyak-  
 saṃbodhim abhisam̄budhyate /

<sup>210</sup>bodhisattvabhūmāv ādhāre yogasthāne ekādaśamāṇ<sup>211</sup> kṣāntipatālam̄ samāptam<sup>212</sup> /

15

<sup>200</sup> C,W: upakārābhīmukho(W:khyo).

<sup>201</sup> R,K,Du: nāpa(Du: no)kārakriyayā apakāram(K: apakārtāram) upekṣate. Tib: phan 'dogs pa'i bya ba byed pa la gnod par mi byed pa. Ch: 非一益己捨而不益.

<sup>202</sup> C om. m.

<sup>203</sup> R: bhavīt.

<sup>204</sup> R om. hrīvyapatrāpyena. Tib: no tsha ba śes pa daṇ khrel yod pa.

<sup>205</sup> R,K: aksāntidharmam̄ sa sahāyam̄.

<sup>206</sup> R,C,K,W om. sarveṇa.

<sup>207</sup> R om. sya.

<sup>208</sup> Du: kṣāntyādikāṇ. C om. kṣāntyādikāṇ viśuddha. K: -kṣāntyādikāstiśuddha- instead of -kṣāntyādikāṇ viśuddha-.

<sup>209</sup> K: niḥśritya.

<sup>210</sup> Du adds iti.

<sup>211</sup> R,K om. ma.

<sup>212</sup> K,Du om. samāptam.